

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	『聖ブレンダンの航海』古仏語版の概要
Author(s)	太古, 隆治
Citation	広島大学フランス文学研究, 40 : 1 - 25
Issue Date	2021-12-25
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/52034">10.15027/52034</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052034">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052034</a>
Right	
Relation	



## 『聖ブレンダンの航海』古仏語版の概要

太古 隆治

『聖ブレンダンの航海 (*Navigatio sancti Brendani*)』(以下 *Navigatio* と略す) の邦訳を『広島大学フランス文学研究』に寄稿して 20 年近くになる<sup>1)</sup>。邦訳に使用したラテン語テキストは、アメリカの研究者 Carl Selmer が 1959 年に公刊したものであった<sup>2)</sup>。*Navigatio* 写本はこの Selmer 版の時点で 120 点だったが、その後の研究の成果により現在では 141 を数える。Selmer のエディションは、作品が書かれた場所や年代、底本写本の選択などに対して批判が寄せられながらも、発刊以来 *Navigatio* の標準テキストとして使用されてきた。Selmer 版に代わる新しいエディションが長いあいだ待たれる中、実際複数の学者がこれに取り掛かっていたが、仕事半ばに亡くなるなどして、実現が遅れていた。

Selmer 版から半世紀あまりを経た 2014 年、これに取って代わるエディションがイタリアから現れることになった<sup>3)</sup>。Giovanni Orlandi と Rossana Guglielmetti という二人の研究者の共著という形を取っているが、Giovanni Orlandi は出版の 7 年前に他界しており、あとを託された弟子にあたる Rossana Guglielmetti が完成させたものだ。『聖ブレンダンの航海 世界の神秘を求めて』と題するこの新しいエディションは、Orlandi が残したラテン語テキストおよび後注と、Guglielmetti の手による序文、写本分類と系統樹を骨格とし、全体で 500 頁を超え、その規模と内容で Selmer 版を凌駕する。Guglielmetti はさらに 2017 年に専門的研究者向けとして自身が‘*editio maior*’と位置づける 2 巻目を公刊し、恩師から引き継いだエディションを完了した<sup>4)</sup>。ここでは個々の写本の詳細な記述と写本系統の精緻な分析をおこない、ラテン語テク

---

<sup>1)</sup> 太古隆治「聖ブレンダンの航海 (1)」、『フランス語フランス文学研究』、n°22、2003、pp.62-83.

太古隆治「聖ブレンダンの航海 (2)」、『フランス語フランス文学研究』、n°23、2004、pp.48-71.

<sup>2)</sup> Carl Selmer, *Navigatio sancti Brendani abbatis from Early Latin Manuscripts*, University of Notre Dame Press, 1959 (Publications in Medieval Studies 16) [repr.: Dublin, Four Court Press, 1989].

<sup>3)</sup> *Navigatio sancti Brendani: alla scoperta dei segreti meravigliosi del mondo* a cura di Giovanni Orlandi e Rossana E. Guglielmetti, Firenze, Edizioni del Galluzzo, 2014.

<sup>4)</sup> *Navigatio sancti Brendani: editio maior* a cura di Rossana E. Guglielmetti, testo critico di Giovanni Orlandi e Rossana E. Guglielmetti, Firenze, Edizioni del Galluzzo, 2017.

ストには網羅的バリエーションを付すなどして頁数は700を越え、前作を凌ぐ大著となっている。

このエディションの多々ある功績の中、完璧とも言える系統樹を作り上げたことが特筆にあたいする。この系統樹において *Navigatio* の写本伝承は  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、 $\delta$ 、 $\epsilon$  の5つのファミリアに系統分けされ、各ファミリアの下に延びる細かな分枝に141点の写本が漏れることなく配置されている。

ラテン語テキストはというと、内容的に *Selmer* 版とほとんど変わらないが、言語的には顕著な違いを見せる。*Selmer* のラテン語テキストはファミリア  $\epsilon$  に属す11世紀の写本<sup>5)</sup>を底本としていたが、OG<sup>6)</sup>は現存写本から想定される「祖型 (archetipo)」を復元する道を選択した。両者のテキストの隔たりを理解するには、シャルルマーニュのラテン語政策というラテン語史上の一大転機を思い起こす必要がある。周知のように、シャルルマーニュはラテン語を公式言語に採用し、広大な領土におけるラテン語の方言差や「乱れ」の問題を解消するため古典ラテン語への回帰を推進した。そしてこのことが、書記ラテン語と庶民のラテン語との隔たりを決定的なものにし、ひいてはフランス語の誕生に拍車をかけることになる。

OGの再構築テキストはシャルルマーニュ以前の言わば「乱れた」ラテン語、他方 *Selmer* のテキストはシャルルマーニュ以後の検閲を経た「洗練された」ラテン語とすることができる。しかし、その「乱れた」ラテン語こそ *Navigatio* の作者が用いたラテン語に近く、このテキストが今後 *Navigatio* の標準テキストになることは疑いない。

*Navigatio* がヨーロッパ中世を通じて大きな成功をおさめた作品の一つであることは現存する141というラテン語写本の数が示しているが、合算しておよそ100点に昇る俗語版写本もまたその人気の高さや広がりや物語る。また、その半数以上をフランス語版が占め、フランス語圏が俗語版の発展の主要な舞台だったとすることができる。

そのフランス語版としては、*Benedeit* 版、散文版 I、散文版 II、そして *Image du Monde* 版と呼ぶ4つの異なる版が伝わっている<sup>7)</sup>。

---

<sup>5)</sup> Gent, Universiteitsbibliotheek, 401.

<sup>6)</sup> 今後 *Orlandi* と *Guglielmetti* の連名を OG、その2014年のエディションを OG 2014、2017年のエディションを OG 2017 と略す。

<sup>7)</sup> Cf. *The Brendan Legend: A Critical Bibliography*, by Glyns S. Burgess and Clara Strijbosch, Dublin, Royal Irish Academy, 2000, pp. 49-57.

これよりこの4版を順に取り上げていくが、関連写本やエディション、ラテン語 *Navigatio* との関係などに主に焦点を絞り、ラテン語版からフランス語版にかけて何がどう変わったかについては概略を述べるにとどめる。それゆえ、各版についての批判的ビブリオグラフィーの提示をさほど超えるものではないをことわっておく。

## 1. Benedeit 版およびそのラテン語訳

### 1-1 写本

(1) **A: London, British Library, Cotton Vespasian B X (I)**, ff. 1r-11r. 14 世紀初め

[[http://www.bl.uk/manuscripts/Viewer.aspx?ref=cotton\\_ms\\_vespasian\\_b\\_x\\_fs001r](http://www.bl.uk/manuscripts/Viewer.aspx?ref=cotton_ms_vespasian_b_x_fs001r)]

(2) **B: Paris, Bibliothèque Nationale de France, nouv. acq. fr. 4503**, ff. 19v-42r. 12 世紀末または 13 世紀初め [<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b105485379/f42.item>]

**A** 写本中の 169 行が欠け、別の 2 行が加わる

(3) **C: Oxford, Bodleian Library, Rawlinson D 913**, f. 85. 12 世後半または 13 世紀前半 Waters 版 1-310 行の部分のみ残る断片

(4) **D: York, Minster Library and Archives, XVI, K, 12 (I)**, ff. 23r-36r. 12 世後半または 13 世紀前半 12 行が欠け、他写本にない 9 行が存在する

(5) **E: Paris, Bibliothèque de l'Arsenal, 3516**, ff. 96r-100v. 13 世紀後半 1757 行

[<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b55000507q/f197.item.r=Arsenal%203516>]

(6) **F: Coligny-Genève, Fondation Martin Bodmer, 17**. 13 世紀前半

Waters 版 794-893 行, 1169-85 行および 1188-206 行に該当する断片

[<https://www.e-codices.unifr.ch/en/searchresult/list/one/fmb/cb-0017>]

作品が極めて古いためか、写本の現存状況はよくない。上の 6 写本が残っているものの、そのうち **C** と **F** の 2 写本は断片でしかない。また **E** 写本はミニアチュールのほとんどが切り取られており、そのため Benedeit の作品もミニアチュールの裏側に書かれていた 70 行ほどのテキストが失われている。そのような中、**A** 写本は 14 世紀という最も新しい部類の写本でありながら、Benedeit のテキストの古い状態をよく伝えており、これが残っていたことはフランス文学史にとって幸運というほかない。この写本はまた Benedeit のテキストに続いて *Navigatio* のラテン語テキストがコピーされている。同じコピストがフォリオの表側で Benedeit を終えたあと、その

裏側から *Navigatio* を書き始めており、はじめからフランス語とラテン語の言わば *Navigatio* コーパスを作る意図のもと作成された、きわめて特異かつ貴重な資料だ<sup>8)</sup>。

## 1-2 エディション

古くから研究者の関心を集めた作品であり多くのエディションがあるが、次の二種が代表的なものとして挙げられる。

(1) *The Anglo-Norman Voyage of St. Brendan by Benedeit, a poem of the early twelfth century edited with introduction, notes and glossary* by E. G. R. Waters, Oxford, Clarendon Press, 1928, ccii + 212 p.) [repr.: Geneva, Slatkine, 1974].

(2a) Benedeit, *The Anglo-Norman Voyage of St Brendan*, edited by Ian Short and Brian Merrilees, Manchester, Manchester University Press, 1979, viii + 136 p.

(2b) *Le voyage de saint Brandan par Benedeit. Texte et traduction* de Ian Short. Introduction et notes de Brian Merrilees, Paris, Union générale d'éditions (10/18, 1652, Bibliothèque médiévale), 1984, 142 p.

(2c) Benedeit, *Le voyage de saint Brendan. Édition bilingue. Texte, traduction, présentation et notes* par Ian Short et Brian Merrilees, Paris, Champion (Champion Classiques, Moyen Âge, 19), 2006, 207 p.

いずれも **A** 写本を底本とする。(1)の Waters 版は、序文、古仏語テキスト、注、語彙録、あらゆる点で充実しており、ほぼ 100 年前に出版されたものでありながらいまだに重要性を失わないエディションである。古仏語テキストの総行数は 1840 行で、**A** 写本で欠落したと見なされる 6 行が補われている。それに対し、Short と Merrilees の二人を編者とする(2)は **A** 写本にのみ基づく(1834 行)。(2b)と(2c)は(2a)のフランス語使用者向けの版で、現代フランス語の対訳が付く。(2b)より(2c)のほうが注が多く、しかも最新の研究を反映する。加えて(2c)はそれまでの後注が脚注に変えられたことがありがたい。

---

<sup>8)</sup> ラテン語テキスト(ff. 11v-21r)は OG の **L**<sup>9</sup> で、おおむね **γ**<sup>19</sup> に属すが、**ε**<sup>26</sup> に属す部分もある。分枝 **γ**<sup>19</sup> にはほかにラテン語版ブレンダン伝 (*Vita Salmanticensis*) とアイルランド語版ブレンダン伝 (*Betha II*) が属す。

### 1-3 フランス語テキスト

*Navigatio* は下に引用するとおり主人公の系譜の記述により始まる。

Sanctus Brendanus, filius Finlocha nepotis Alti, de genere Eogeni stagni Len regionis Mumenensium ortus fuit. Erat vir magnae abstinenciae et in virtutibus clarus, trium milium fere monachorum pater.<sup>9)</sup>

聖ブレンダーヌスは、アルテの後裔フィンルグの息子として、ムメニアの国、レーン湖のエオゲン家の血統につらなまって生まれました。厳しい禁欲者にして、数々の奇跡で名高く、三千人におよぶ修道士の父となりました。

これに対し、Benedeit の作品は次のように王妃への呼びかけで始まる。

Donna Aaliz la reïne,	王妃アリスさま、
Par qui valdrat lei divine,	あなたにより神の法が強固になり、
Par qui creistrat lei de terre	あなたにより地上の法が栄える。
4 E remandrat tante guerre,	多くの戦いが止むのも
Por les armes Henri lu rei,	アンリ王の軍勢ゆえ、
Par le cunseil qui ert en tei,	あなたのうちにある助言ゆえ。
Salüet tei mil e mil feiz	幾千たびもあなたにご挨拶するのは
8 Li apostoiles danz Benedeiz.	特使ベネデイト。
Que comandas, ço ad enpris,	お命じになったこと、それを受けとめ、
Secund sun sens en letre mis,	知力のかぎり文字に移しました。
En letre mis e en romanz	文字に移し、俗語に変えました、
12 Esi cum fud li teons cumanz,	あなたのご命令どおりに
De saint Brendan le bon abeth.	良き修道院長聖ブレンダンの物語を。
( ..... )	
Icist seinz Deu fud ned de reis	この神の聖人は
20 De naisance fud des Ireis;	アイルランド人の王家に生まれ、
Pur ço que fud de regal lin,	王家の血統のゆえに
Pur oc entent a noble fin. <sup>10)</sup>	高貴な目的に身をゆだねる。

<sup>9)</sup> OG 2014, p.2; OG 2017, p. 457.

<sup>10)</sup> Waters, *op.cit.*, p. 3.

「ムメニアの国（現マンスター）」の特殊な系譜で始まる *Navigatio* に対し、フランス語のほうは、**Benedeit**（主格で **Benedeiz**）と名のる人物が作品の依頼者に献辞を述べるプロローグで始まり、理解困難な系譜はわかりやすい内容に変えられて引用最後の4行を占める。作者はその名前（ラテン語で **Benedictus**）からして聖職者と見て間違いないだろう。被献呈者はイングランドのノルマン王朝アンリ1世の王妃アリスで、これにより制作年代を12世紀初頭に特定できる。また作者がどのような読者ないし聴衆を対象として制作を行なったかもおのずと知れよう。

**Benedeit** 版はアングロ・ノルマン語で書かれた8音綴平韻詩で、**Waters** 版で1840行を数える。ドイツ語版などを含め *Navigatio* 俗語版の先鞭を切るだけでなく、12世紀フランス文学において主流となる8音綴平韻形式の先駆け的作品でもある。

依頼主の要望かそれとも **Benedeit** の自発的選択か知るよしもないが、**Benedeit** は *Navigatio* を忠実に俗語に翻訳する道は取らなかった。ラテン語写本を順にめぐりつつ筆を運んでいるのは確かなものの、宮廷の聴衆の好むあるいは宮廷の聴衆に聞かせたい物語に書きかえ、こうして作品はきわめて自由な翻案に仕上がる。その端的な一面に聖歌の扱いはある。神のために聖歌を歌うことは修道士の日々の重要な務めであり、*Navigatio* でも時禱や祭事を中心とする数々の場面で聖歌が歌われるが、**Benedeit** の作品から聖歌はことごとく姿を消す。とりわけ、一日中聖歌を歌って生きる三組の聖歌隊の島の第17章は章ごと削除されている。その一方、宮廷の聴衆の関心の強い「ユダ」や「楽園」は大幅に書き加えが行われ、それぞれ *Navigatio* の2倍をはるかに超える長さに膨らむ。**Benedeit** の改作の手は程度の差はあれ作品全体に行き渡り、本質的に修道士による修道士のための読本と定義されうる *Navigatio* は、宮廷詩人による宮廷の聴衆のための物語詩に変貌している。

#### 1-4 : **Benedeit** 作品の再翻訳

この新しい *Navigatio* がノルマン王朝の宮廷にとどまらず広く好評を得たことは疑いない。その証拠として、**Benedeit** が俗語に置き換えたこの作品をまたラテン語に書き直したテキストが少なくとも3点作られた事実を挙げることができる。

##### 1-4-1 : ラテン語散文訳

そのうちの2点は散文で、それぞれ1写本が現存し、いずれにもエディションがある。

(1)写本 : Oxford, Bodleian Library, 3496 (旧 E Musaeo 3), pp. 213-26, 12-3 s. (**Waters** による **L** 写本)

エディション : Charles Plummer, *Vitae sanctorum Hiberniae*, 2 vols Oxford, Clarendon Press, 1910 [repr.: Dublin, Four Courts Press, 1999] (*Vita secunda sancti Brendani ...*のタイトルで **L** 写本のテキストが vol.2, pp. 270-92 に載る).

これは発見当初 **Benedeit** が翻案に用いたラテン語テキストとみなされていたが、**Waters** などによってその逆と論証された経緯がある。その **Waters** のエディションには、フランス語テキストの下にこのラテン語テキストが印刷されている。非常に凝った文体が用いられており、**Benedeit** との対応を追うのが難しいことがしばしばある。

(2)写本 : Lisbon, Biblioteca Nacional, Alc. 380 (旧 Biblioteca Nacional 256), ff. 81v-91r (Selmer による **M** 写本) 14 s. (Selmer) / 13 s. (Nascimento).

エディション :

(2-1) Carl Selmer, «*The Lisbon 'Vita sancti Brandani Abbatis': A Hitherto Unknown Navigatio-Text and Translation of Old French into Latin*», in *Traditio*, 13, 1957, pp. 270-92.

(2-2) Aires A. Nascimento, *Navegação de S. Brandão nas fontes portuguesas medievais: edição crítica de textos latinos, tradução, estudo introdutório e notas de comebtário*, Obras clássicas da literatura portuguesa, 1, Lisbon, Edições Colibri, 1998. (*Navigatio Po*<sup>1</sup> 写本と **Benedeit** 版ラテン語訳 **M** 写本の校訂本で序文・対訳はポルトガル語).

このラテン語訳は **Waters** にはまだ知られておらず、**Selmer** によって初めて報告された。こちらは比較的平易なラテン語に訳されており、**Benedeit** との逐語的対応も少なくない。

1-4-2 : Gautier de Châtillon (ca. 1130-1200)によるラテン語韻文翻訳

写本 :

(1) Cambridge, Trinity College, O. 1. 17 (nr. 1041), 15s. (冒頭の 2 スタンザのみ).

(2) London, British Library, Cotton Vespasian D IX, ff. 2r-10v, 14 s.



エディション：

(1) Patrick T. Moran, *Acta sancti Brendani: Original Latin Documents connected with the Life of Saint Brendan, Patron of Kerry and Clonfert* (Dublin: Kelly, 1872), pp. 45-84 (*Vita metrica* のタイトルで本テキストが載る).

(2) Carsten Wollin, *Saints' Lives by Walter of Châtillon: Brendan, Alexius, Thomas Becket*, Toronto Medieval Latin Texts (Toronto, Pontifical Institute of Medieval Studies), 2002.

Walter of Châtillon 作と同定した 3 つの聖人伝のエディション

Gautier de Châtillon は 12 世紀の著名なラテン語詩人で、代表作にアレクサンダー大王に関する長編叙事詩があるほか、上記エディションのタイトルにあるように、この詩人に帰される複数の聖人伝が残っている。その一つ *Vita S. Brandani* 『聖ブランドン伝』は編者の Carsten Wollin によると教皇座をめぐる争いでフランスに亡命中のアレクサンデル 3 世の要請により執筆されたもようである<sup>11)</sup>。Wollin は執筆年代を 1163-65 年と推測する。作品はアクロバティックとも言える技巧を駆使した韻文で、Benedeit 版が *Navigatio* の大胆な翻案ならば、Gautier の作品も Benedeit に負けず劣らず大胆な翻案とすることができる。Gautier は Benedeit が削除した第 17 章を復活させており、状況から察するに、亡命中のアレクサンデル教皇の宮廷に、Benedeit 写本と *Navigatio* 写本の両方がそなわっていたのだろう。

Benedeit の作品そのものの評価に関し、生の声に匹敵する証言のない中、以上のような幾つものラテン語翻訳の存在は、間接的ながら同作品への評価の高さとその需要の広がりのおかげとすることができるだろう。

## 2 散文版 I

### 2-1 写本

正確な年代は不明だが、早ければ 12 世紀末、遅くとも 13 世紀半ばまでに、2 つの *Navigatio* 散文訳が現れた。合わせて 23 の写本が現存するが、散文版 I と呼ぶ一

---

<sup>11)</sup> Carsten Wollin, «*The Navigatio sancti Brendani and Two of its Twelfth-Century Palimpsests: Brendan Poems by Benedeit and Walter of Châtillon*», in *The Brendan Legend: Texts and Versions*, edited by Glyn S. Burgess and Clara Strijbosch, Leiden-Boston, Brill, 2006, pp. 281-313.

方の仏訳はパリのフランス国立図書館フランス語 1553 写本<sup>12)</sup>にのみ残り、それ以外の 22 写本すべてが散文版 II を伝える。写本のこの極端な偏りについてはのちに触れる。1553 写本は 1285 年頃に編纂された作品集で、いわゆる「古代もの」の *Roman de Troie* で始まり、Ruteboef の風刺詩、宗教作品、レーやファブリオーなど、韻文・散文を問わず大小様々な作品が収録されている<sup>13)</sup>。*Navigatio* の仏訳、すなわち散文版 I は 7 番目を占める。

## 2-2 エディション

下のとおり Jubinal と Wahlund の 2 つのエディションが存在する。

(1) Achille Jubinal, *La Légende latine de S. Brandaines, avec une traduction inédite en prose et en poésie romanes, publiée d'après les manuscrits de la Bibliothèque du Roi, remontant aux XIe, XIIe et XIIIe siècles*, Paris, Sylvestre et Jules-Albert Merklein, 1836.

(2) Carl Wahlund, *Die altfranzösische Prosaübersetzung von Brandans Meerfahrt, nach der Pariser Handschrift Nat.-Bibl. fr., 1553*, Uppsala, Almqvist och Wiksell (Skrifter utgifna af K. Humanistiska Vetenskaps-Samfundet i Upsala, IV, 3), 1900, xc + 335pp [repr.: Geneva: Slatkine, 1974].

最初の Jubinal の刊本は、タイトルからうかがえるように、当時の「王室文庫」所蔵のラテン語写本とフランス語写本から抜粋した聖ブレンダン伝説集で、*Navigatio* の 1 テキスト(+短いラテン語テキスト 2 点)、今述べている散文版 I、本稿の最後に取り上げる *Image du Monde* 版を収めている。*Navigatio* の研究がまだ進んでいなかった当時、この集成の公刊は大いに意味のあったことに違いない。残念なことに Jubinal のテキストはあまりにも間違いが多く、参照する場合には十分な注意を要する。当該写本は Gallica に公開されているので、これと併せて読むのが賢明だろう。

Wahlund の刊本はというと、『パリ国立図書館フランス語 1553 写本に基づく「ブレンダンの航海」古仏語散文訳』のタイトルは散文版 I のエディションを思わせるが、実際は散文訳写本を総見し、印刷された古仏語テキストも散文版 I だけでなく

---

<sup>12)</sup> Paris, Bibliothèque Nationale de France, fr. 1553, ff. 255r-266v.

<sup>13)</sup> 数名の書写生がたずさわった写本で、524 枚の羊皮紙に 52 点の作品を収める。第 14 話の *Roman de la Violette* が終り次の作品に移る前に、5 行を占める次の加筆(散文)がある: Chi define li Roumans de Gerart de Nevers et de la Violete, qui fu escrits l'an de l'Incarnation Nostre Signour Jhesu Crist mil .CC. et .IIII.<sup>XX</sup> et quatre, el moys de fevrier (f. 325v). *Roman de la Violette* の成立年代は 1228 年前後であり、この「1284 年 2 月」は *Roman de la Violette* をこの写本に転写し終えた日付を指す。

散文版 II も含む<sup>14)</sup>。ただし、タイトルが示唆するようにエディションの重点は散文版 I にあり、散文版 II に関しては二義的扱いの感を免れない。見開きで左ページにラテン語テキスト、右ページに古仏語テキストを配して印刷されている。古仏語は、写本のスタイルをほぼそのまま活字化したいわゆる「外交的エディション (édition diplomatique)」で、読みやすいものではないが、転写そのものは正確と言える。巻末の語彙集は網羅的で、対応するラテン語が現代語語義の代わりをなす。ラテン語との対応で語義が明瞭なせいか、トブラー・ロマチュの古仏語辞典はここから多くの例文を採用している。

### 2-3 ラテン語手本

散文版 I に添えられたラテン語テキストは特定の写本に基づくものではなく、それまで公刊されてきたいくつかのエディションなどから Wahlund 自身が練り上げた再構築テキストだが、その土台は Jubinal (もしくは Patrick Moran) のテキストにあるようだ<sup>15)</sup>。

この仏訳のラテン語手本について、最近、Giulia De Martino と Rossana Guglielmetti の連名の論文が散文版 I のラテン語手本について分析を行なった<sup>16)</sup>。その結果、仏訳に使用された *Navigatio* テキストは系統樹の  $\gamma^{14}$  に属し、その中の **La** 写本、すなわちラン市立図書館 345 番写本<sup>17)</sup>にもっとも近いことが明らかになっている。これにより、当該論文から借用した次頁の系統図が示すとおり、Guglielmetti は **La** と散文版 I を結ぶ分枝  $\gamma^{25}$  を新たに設けることになった (略号 *volg* は散文版 I を表す)。なお、Jubinal と Moran が *Navigatio* テキストに用いた写本は **P<sup>13</sup>** で、 $\gamma^{11}$  の下位分枝  $\gamma^{18}$  に属す。

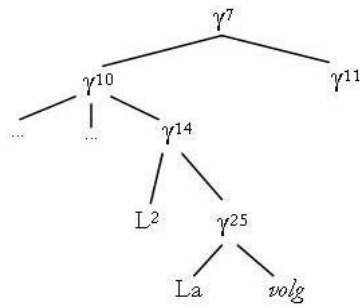
---

<sup>14)</sup> Wahlund は散文版 I のパリ 1553 写本のほかに、散文版 II として 17 写本を数えていた。

<sup>15)</sup> Patrick F. Moran (ed.), *Acta Sancti Brendani. Original Latin Documents Connected with the Life of Saint Brendan, Patron of Kerry and Clonfert*, Dublin, W. B. Kelly, 1872, pp. 85-131. Jubinal も Moran も複数の写本を参照しながらパリの BnF. latin 2333A 写本を底本としている。

<sup>16)</sup> Giulia De Martino, Rossana Guglielmetti: *Il volgarizzamento oitanico della «Navigatio Brendani» nel ms. Paris, BNF. fr. 1553 e il suo modello latino*, in *Carte Romanze* 3/1 (2015), pp. 107-126.

<sup>17)</sup> Laon, Bibliothèque Municipale, 345.



## 2-4 フランス語テキスト

テキストは典型的なピカルディー方言で書かれている。写本が 1285 年ごろに制作されたことがわかっており、必然的に *Navigatio* 訳もそれ以前に作られたことになる。仏訳者に帰されえない単純な欠落や特殊なくずれが数多くあり、オリジナル以来かなりの年数とコピーを経ていることをうかがわせる。Jubinal はこの古仏語訳は 12 世紀末に遡りうると記しているが、その根拠は挙げていない<sup>18)</sup>。Paul Meyer の見方は慎重で、大雑把に 13 世紀中葉を想定している<sup>19)</sup>。

仏訳者の翻訳姿勢は Benedeit のその対極にある。下に引用する冒頭文からそうであるように、訳者は手本をきわめて忠実にフランス語に置きかえる。

**Brandainnes fu uns sains hom fils Synloca, niés d’Alty de le lignie Eogeni, et fu nés de le region Stanile des Mumensijens.**

ブランデーヌは、スィンロカの息子にして、エオゲン家のアルティの末裔なる聖人で、ムメンスイジェン人の国スタニルの生まれでした。

読者になじみのないブレンダンの系譜が省略されることなく一語一語フランス語に置きかえられているのが見てとれる。OG のラテン語祖型テキストと異なる点があるとしても、それは **La** 写本と一致することから、仏訳者が自身の手本に見出したものだろう。

<sup>18)</sup> A. Jubinal, *ibid.* p. v.

<sup>19)</sup> Paul Meyer, «*Légendes hagiographiques en français. II. Légendes en prose*», in *Histoire Littéraire de la France*, t. 33, 1906, p. 387.

冒頭、主人公の名前が ‘Brandainnes’ と 3 音節で綴られる（斜格では格語尾-s が落ちる）<sup>20)</sup>。このような綴り方は、この散文版 I のみで、Benedeit をはじめ他の古仏語版には現れず、いずれにおいても ‘Brendan’ または ‘Brandan’（写本によっては ‘Brandain’）である。どうやら、翻訳者は一般的な形ではなく敢えてラテン語 ‘Brandanus’ の 3 音節を保ち、ラテン語の響きを半ば装ったような語形を選択したようだ<sup>21)</sup>。ただし、この形も第 1 章の 1 節と 2 節までで、それ以降は 2 音節の ‘Brandain’ に変わる。これはおそらく ‘Brandainnes’ の表記に違和感を抱いたコピストが途中から標準的な発音に変えていった結果であり、翻訳者自身は一貫して 3 音節の語形を用いていたと見るのが妥当だろう。

この冒頭文に見る原典尊重の姿勢は終始一貫しており、その忠実性は Wahlund の表現を借りれば時として「隷属的」とも言うことができる。ただし、ここでは例示できないが、読者に配慮して柔軟な訳語選択をする場合も見られうることを付記しておく。

### 3 散文版 II

#### 3-1 写本

散文版 I が 1 写本にしか残っていないのに対し、散文版 II は次頁のリストのとおり 22 写本に伝わっており、この翻訳の相応の成功をうかがわせる。

散文版 I の唯一の写本はジャンル・形式の異なる様々なテキストから成る作品集だった。これに対して、散文版 II が含まれる写本は、わずかな例外をのぞき、聖人伝という同じジャンル、散文という同じ形式のテキストから成るという共通の性格がある<sup>22)</sup>。散文版 II は、散文版 I とは対照的に、この「聖人伝集 (légendier)」と

---

<sup>20)</sup> 「ブレンダン」の名のラテン語形は元々 ‘Brendanus’ だが、確認できるかぎり 11 世紀の写本から新しい形の ‘Brandanus’ が現れ、時代が進むにつれ増加傾向にある。散文版 I の ‘Bran-’ は翻訳者の手本の ‘Brandanus’ を受けているものと思われる。第 2 音節の ‘-dain’ は強勢のある長母音をフランス語として発音した場合に起こる自然な「ゆがみ」であろう。

<sup>21)</sup> 同じようなことが ‘Barintus / Barintes’ に言える。‘Barintus’ は Benedeit において ‘Barinz’ (vv. 75 & 101)、*Image du Monde* と散文版 II において常に ‘Barins’ だが、散文版 I では ‘Barintes’ と 3 音節で綴られる。また、クジラの ‘Jasconius’ については 10 章 13 節で ‘Jaconius’ (主格)、11 章 53 節で ‘Jasconii’ (属格)、27 章 7 節で主格 ‘Isconius’ (主格) と綴りが乱れるが、生き残った綴り字から判断して、翻訳者は格語尾も含めラテン語形をそのまま用いたものと思われる。

<sup>22)</sup> ダブリン写本のみ例外で、聖書外典に分類されるテキスト数点と『聖パトリックの煉獄』そして『聖ブレンダン伝』の仏訳を収める。

散文版II 写本リスト

	所蔵施設等	年代	制作地	Meyer	太古
(1)	<b>Besançon, Archives départementales du Doubs, 6</b> <i>Navigatio</i> 訳 6.9-9.22, 18.2-23.11相当部のみ残る2葉の断片写本	14 s.	?		$\beta$
(2)	<b>Bruxelles, Bibliothèque royale de Belgique, 9225</b> , ff. 124r-132v	14 s. (1/2)	Brabant	G	$\delta$
(3)	<b>Bruxelles, Bibliothèque royale de Belgique, 10326</b> , ff. 189r-203v [https://opac.kbr.be/Library/doc/SYRACUSE/18413425/vies-de-saints]	13 s. (ca.1250)	Nord	B	$\beta^2$
(4)	<b>Chantilly, Bibliothèque et Archives du Château, 456</b> , ff. 160r-168r [https://bvmm.irht.cnrs.fr/mirador/index.php?manifest=https://bvmm.irht.cnrs.fr/iii/f/413/manifest]	14 s. (1312)	Paris (6)と同工房?	E	$\alpha^1$
(5)	<b>Dublin, Trinity College Library, 951</b> , ff. 121v-154v	14 s.	?		$\beta$ - $\gamma$
(6)	<b>Genève, Bibliothèque de Genève, Comites Latentes 102</b> , ff. 173v-183r [https://www.e-codices.unifr.ch/fr/bge/cl0102/bindingA/0/Sequence-1627]	14 s. (ca.1320)	Paris	E	$\alpha^1$
(7)	<b>London, British Library, Additional 6524</b> , ff. 129v-137v	14 s. (1/2)	Angleterre	B <sup>1</sup>	$\beta^1$
(8)	<b>London, British Library, Additional 17275</b> , ff. 262r-269v.	14 s. (1/2)	France centrale	G	$\delta^2$
(9)	<b>Oxford, Queen's College Library, 305</b> , ff. 148r-159r	15 s. (ca.1460)	Avignon ou Carpentras	<i>isolé</i>	
(10)	<b>Paris, Bibliothèque Mazarine, 1716</b> , ff. 38bisra-49vb	13-14 s.	Ile de France	E <sup>1</sup>	$\alpha$
(11)	<b>Paris, Bibliothèque nationale de France, français 183</b> , ff. 122r-129v [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8426000g/f257.item]	14 s. (ca.1327)	Paris	G	$\delta^1$
(12)	<b>Paris, Bibliothèque nationale de France, français 185</b> , ff. 128r-134r [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84260029/f259.item]	14 s.	Paris	G	$\delta^2$
(13)	<b>Paris, Bibliothèque Nationale de France, fr. 413</b> , ff. 189v-198v [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b90076543/f194.item]	15 s.	?	F	$\epsilon$
(14)	<b>Paris, Bibliothèque Nationale de France, français 423</b> , ff. 56r-62v [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9059127g/f59.item]	14 s.	Lyon (occitan)	<i>isolé</i>	$\gamma^2$
(15)	<b>Paris, Bibliothèque Nationale de France, français 6447</b> , ff. 204r-211r [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b90075392/f439.item]	13 s.	Nord	D <sup>1</sup>	$\gamma^1$
(16)	<b>Paris, Bibliothèque nationale de France, français 13496</b> , ff. 248r-259r [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9007639d/f279.item]	13 s. (fin)	Bourgogne	<i>isolé</i>	$\alpha$
(17)	<b>Paris, Bibliothèque Nationale de France, français 17229</b> , ff. 182r-194v [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9061254h/f183.item]	13 s.	Artois (Arras?)	D	$\beta^1$
(18)	<b>Paris, Bibliothèque nationale de France, français 20330</b> , ff. 401v-413r [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b90619041/f414.item]	13-14 s.	Auvergne		$\gamma^2$
(19)	<b>Paris, Bibliothèque Nationale de France, français 23117</b> , ff. 253r-262r [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b90639749/f266.item]	13-14 s.	?	F	$\epsilon$
(20)	<b>Paris, Bibliothèque nationale de France, nouv. acq. fr. 10128</b> , ff. 186r-200r [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b10073538k/f194.item]	13 s.	?	B	$\beta^2$
(21)	<b>Paris, Bibliothèque Nationale de France, nouv. acq. fr. 23686</b> , ff. 187v-194r [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8446925z/f378.item]	13 s. (ca.1250)	Île de France ou Champagne	A内包	$\gamma^2$
(22)	<b>Puy-en-Velay (Le), Bibliothèque du Grand Séminaire, sans cote</b> , 385v-400v	13-14 s.	?		

いう器に乗ることができたがゆえに、多くの写本に生き残ったとすることができるだろう。

表の **A** から **G** は、聖人伝研究に尽力した Paul Meyer がフランス語散文聖人伝集に行った分類の略号で、おおむねクロノロジックな順番になっている<sup>23)</sup>。Meyer によるとフランス語散文聖人伝集は 1250 年ごろから見られはじめ、最初は数十点程度のものだったのが、次第に収録テキストを増やし、100、200 といった大規模な集成に膨らんでいく。**C** グループに散文版 II を含む写本はなく、それゆえリストに **C** は見られない。略号の入っていない写本のうち(18)と(22)は Jacobus de Voragine が編纂した *Legenda Aurea* の仏訳であるため、Meyer は調査対象としなかったものだが、いずれも同一訳者による *Legenda Aurea* の完訳に別の聖人伝二十数点を付け加えたもので、その中に散文版 II が含まれている。**G** に分類された 4 写本は全て 14 世紀前半のもので、そのうち(8) (11) (12)はこの同じ *Legenda Aurea* 仏訳より数点から数十点を借用している。

ギリシャ文字の略号は *Navigatio* 散文版 II に限定して筆者が行なっている分類で、まだ完全なものではないが、大枠で Meyer の分類に重なり合う。分類は Wahlund の底本を含むグループを **α** とし、このグループに近い順に **β γ** を設けた。**β** と **γ** は同一グループに括ることができるが、細かい点がまだ判然としないため今のところ異なる略号を用いている。**ε** の 2 写本は数多くの欠落を共有し、明らかに縮約を意図して鋳直された写本 (**β** に属していた 1 写本) に由来する。**δ** は **α β γ** から孤立した位置にあり、構成写本の年代に基づけば後進グループに見えるものの、グループの始祖が **α β γ** から分かれたのは散文版 II の伝承の初期のことだろう。なぜなら **α β γ** がそろって失った読みが **δ** に生き残る箇所がいくつか存在するからだ。

22 写本のうち最も古いと目されるのが(3)と(21)で、いずれも 1250 年ごろに製作年が置かれる。しかしながら、どちらのテキストもすでに数世代のコピーを経ており、散文版 II オリジナルの完成年代は 1250 年より一定年数さかのぼらせる必要がある。少なくとも 13 世紀前半に置くことに問題はないだろう。

### 3-2 エディション

すでに紹介したように Wahlund による散文版 I のエディションにこの散文版 II のテキストも添えられている。これは(10)の Mazarine 1716 写本を底本とし、やはり外

---

<sup>23)</sup> Paul Meyer, «*Légendes hagiographiques en français. II. Légendes en prose*», in *Histoire Littéraire de la France*, t. 33, 1906, pp. 378-458.

交的テキストである。これ以外に散文版 II のエディションはない。Mazarine 1716 は、冒頭の数語がかすれて読めないうえ、最後の 300 語ほどの部分が欠落している。そうした物理的欠陥に加えて、時代の新しい綴りや形態法に変えられた箇所が目立ち<sup>24)</sup>、個別の間違ひもそれなりにあるため、散文版 II を代表する写本としてふさわしい写本かどうか疑問の余地が残る。写本伝承を精査した上で、底本を見直し（例えば BnF. fr. 13496）、Wahlund に代わる批判的エディションが待たれる。

### 3-3 ラテン語手本

Wahlund はこの仏訳にも見開きでラテン語テキストを付している。これは散文版 I に付したような再構築テキストと異なり、BnF. latin 15076 の単独転写である。Wahlund はこの写本の選択に関してその根拠を明確にしていないが、彼が当時知りえたテキストの中で散文版 II に添えるに最もふさわしいと判断したのだろう。この写本は OG が構築した系統樹において分枝  $\epsilon^4$  内の  $P^6$  にあたり、実際散文版 II は高い割合で  $\epsilon^4$  に沿う読みを呈する。

ごく最近、Guglielmetti が『異言語間系統樹の必要性 *Navigatio Brendani* の例』<sup>25)</sup> と題し *Navigatio* 写本の系統樹に俗語版を含める必要性を説いた論文を書いている。氏はその中で Cristina Stucchi の研究<sup>26)</sup>の結果を借り、散文版 II の手本が  $\epsilon^4$  に属すことを確認しながらも、 $\epsilon^4$  の下位分枝の込み入った複雑性のせいもあり、さらなる絞り込みは難しいと締めくくる。

### 3-4 フランス語テキスト

翻訳者の姿勢は基本的にラテン語原典への忠実性を保つが、軽微ながら自由な振る舞いを見せることもある。次に引用する冒頭の文にすでにそれが現れている。

**En la vie de mon seignor saint Brandan qui mout est deliteuse a oïr a cors et a ametrovons escrit, et il est voirs, qu'il fu nez d'Yrlande en une contree qui avoit non**

---

<sup>24)</sup> 例えば男性複数主格の 'li frere' が 'les freres' に、'lor frere' が 'leurs freres' になるなど。

<sup>25)</sup> Rossana Guglielmetti, « *La necessità di uno stemma interlinguistico: il caso della Navigatio Brendani* », in *Filologia Medievale*, 2018, pp.111-138.

<sup>26)</sup> Cristiana Stucchi, *Navigatio Sancti Brendani: un confronto con il volgarizzamento franco-piccardo*, Università degli Studi de Milano, 2018 (未公刊).



Staguille ou unes gens habitent qui sont apelé Mumenien **por une cité qui la siet, qui est apelee Mumenie**. Cil .s'. Brandans fu filz Finlocha nies d'Althi du linage Eogenun.

ボールド体部分はラテン語にない部分を表す。翻訳者は「体にも心にも聴き心地よい. . . 伝記」を掲げて書き出し、以下はそのラテン語正典に基づく翻訳であることを暗に告げる。*Navigatio* に出てこない国名アイルンドを翻訳に加えたことに大陸の読者への気配りが認められる。ラテン語テキストにおいても理解の難しいブレンダンの系譜はほぼ踏襲されており、そこに原典尊重の意志を見てとることができる。ただし、読者のために噛み砕いて加えた部分は、冗長で本来の文意を逸脱しており、成功しているとは言えない。

全体として平易化、軽量化、わかりやすさを意識したと思われる手直しや削除が頻繁に見られる。並列文の複文化、疑問文の平叙文化、直接話法の間接話法化、なども見られ、ラテン語を俗語に置き換える際の手法ないし傾向を意識しつつ追ってみるのも面白いかもしれない。しかし、そのためにはできるかぎりオリジナルに近づけた批判的テキストが求められる。少なくとも *Wahlund* による 1 写本の外交的テキストは不十分と言わざるをえない。

#### 4. *Image du Monde*

4-1 *Image du Monde* はラテン語を読めない俗人に世界の知識を提供することを目的としたフランス語初の百科全書的教化文学で、内容は宇宙論、天文学、気象学、地理、歴史など多岐にわたる<sup>27)</sup>。科学的内容には理解を助ける図像がしばしば用いられている。1245 年に最初の版が現れたあと、短期間のうちに「増補改訂版」や散文版があとに続く。下に各版の特徴と呼称を簡単にまとめる。

- 1) 第 1 版(1245 年) [**Réd. A**] (73 写本): 散文目次+6600 行 8 音綴平韻詩 (3 部構成)
- 2) 第 1 版の散文版 [**Réd. P**] (8 写本): 内容は **Réd. A** と変わらない
- 3) 第 2 版の予稿版 [**Réd. H**] (2 写本): 構成・内容が最終版とやや異なる
- 4) 第 2 版(1247 年頃) [**Réd. B**] (24 写本): 11000 行 8 音綴平韻詩 (2 部構成)  
歴史的題材を第 1 部に、科学的題材を第 2 部にまとめた「増補改訂版」  
第 1 部 6 章に *Navigatio* 全訳が載る

---

<sup>27)</sup> とりわけ内容の多くと作品名を *Honorius Augustodunensis* (Honoré d'Autun) の *Imago Mundi* (1130 年ごろ) に負っている。

*Image du Monde* 全体で 100 を超える写本が以上の 4 版に分かれ、中には **Réd. A** と **Réd. B** の混交した写本も存在する。こうした写本伝承の込み入った状況がこれまでエディションの公刊を遅らせてきた。いまのところ手軽に全体を読めるのは散文版しかない<sup>28)</sup>。

作者として **Réd. B** の 1 写本に **Gautier de Metz** の名が現れるほか、**Gossuin de Metz** (または **Gossouin ...**) の名が現れる写本が **Réd. P** にいくつかある。*Image du Monde* 研究の当初は **Gautier de Metz** を作者と見なしていたが、現在は **Gossuin de Metz** のほうを使うことが多い。

#### 4-2 第 1 版における聖ブレンダン

*Navigatio* 仏訳が収められているのは第 2 版、正確には **Réd. H** からだが、聖ブレンダンそのひとは第 2 版で初登場というわけではない。すでに第 1 版においてこの聖人の航海が一度ならず話題に上げられ、その取り上げ方に作者の聖ブレンダンへの並々ならぬ思い入れを感じることもできる。

まず、第 1 版の第 2 部第 5 章は「海の様々な島」と題され、そこで紹介される島の一つがほかならぬ聖ブレンダンがかつて訪れた島だ。

Une autre isle a que on ne puet	とある別の島がある。その島は、
Veoir quant on aler i veut,	行こうとすると見られない。
Et aucune fois est veüe	何度か見られたことがあり、
Et l'apele on l'isle perdue.	「失われた島」と人は呼ぶ。
Cele isle trouva Sains Brendens	その島を見つけたのは聖ブレンダン、
Qui mainte meruelle vit ens	そこにて多くの驚異を見たと、
Si com sa vie le devise.	その『伝記』が語る。
Qui savoir le veut, si (sa ms.) la lise. <sup>29)</sup>	知りたい者はそれを読むべし。

この「失われた島」は *Navigatio* においてブレンダンが到達する樂園の島すなわち「聖人たちの約束の地 (Terra Repromissionis Sanctorum)」であろう。関心ある者は読むよう作者が勧める『伝記』とは、*Navigatio* のラテン語テキストにほかならない。

<sup>28)</sup> O. H. Prior, *L'Image du Monde de maitre Gossouin. Rédaction en prose: texte du Manuscrit de la Bibliothèque Nationale, fonds français 574*, Lausanne-Paris, 1913.

[[https://fr.wikisource.org/wiki/L'Image\\_du\\_monde](https://fr.wikisource.org/wiki/L'Image_du_monde)]

<sup>29)</sup> BnF. fr. 14964 ff. 55r-55v.

また第3部13章は「世界を旅した賢人たち」と題して、世界を学ぶため（神を知るため）に旅をした偉人たちとして、プラトン、アポロニオス、アレクサンダー大王、ヴェルギリウス、プトレマイオス、聖パウロといった歴史的人物が語られ、その締めくくりに聖ブレンダンが登場する。

Sains Brandains ne fina d'errer	聖ブレンダンは旅をやめず、
Adés, et par terre et par mer	いつまでも、地と海のいたるところ、
Por aprendre tant seulement,	ただ学び知ることがために。
Et vit mainte merveille grant.	数多の大いなる驚異を見た。
En une ille vint, ou il vit	とある島に至り、見た、
Oisiaus parlanz com esperit,	霊のごとくしゃべる鳥たちを。
Qui li distrent aucunes choses	彼が尋ねた疑問を
Dont il leur demanda les gloses.	鳥たちは話して明かしてくれた。
Si ala par mains autres lieux	さらに別の多くの地をめぐり、
Et vint .i. si perillieus	至ったのはかくも危ないところ、
Plain de peril e de tormens	そこの危険と苦しみは
Que nus ne porroit penser q'ens.	その場でなければ誰も想像できない。
Aucun vit qui li respondi	出会った男に尋ねると、
Que c'iert Judas qui Dieu traï,	神を裏切ったユダ、
Qui cent foiz tormenteiz estoit	日に百度も拷問されても、
Le jor, ne morir ne pooit.	死ぬことができない、と答えた。
Maint autre grant merveille vit	他の大いなる驚異の遭遇が
Si com en sa <i>vie</i> est escrit. <sup>30)</sup>	彼の『伝記』の中に書かれてある。

ここにも聖ブレンダンの『伝記』が現れる。「鳥の島」と「ユダ」は *Navigatio* の重要なエピソードにほかならず、『伝記』が *Navigatio* を指していることは疑いない。引用部はほんの18行の要約にすぎないが、それでもその前のアレクサンダー、ヴェルギリウス、プトレマイオス、聖パウロについてはそれぞれ6行、2行、4行、4行しか割かれていないので、際立った取り上げ方と言える。

「世界を旅した賢人たち」の章は第1版では作品の終わり近くに置かれていたが、第2版では第1部6章、つまり歴史的題材を集めた前半の最終章に配置替えになる。

---

<sup>30)</sup> BnF. fr. 24428 f. 41v.

同時に各「賢人」の事績は第1版ではほんの数行しか占めていなかったものが、第2版では他の箇所からの移動や新たな書き加えにより、それぞれ数十行から百数十行増え、内容の充実が図られる。ブレンダンの『伝記』にいたっては、18行の要約に約1760行の全訳が取って代わることになる。直前の聖パウロの伝記がちょうど100行、ヴェルギリウス関連部が約200行であることを見ると、聖ブレンダンの取り上げ方は破格と言うほかない。

ともあれ、*Image du Monde* 第1版で作者が読者に読むよう勧めていた聖ブレンダンの『伝記』すなわち *Navigatio* を、第2版の読者はフランス語で最初から最後まで読むことができるようになったわけだ<sup>31)</sup>。

#### 4-3 第2版の *Navigatio* 仏訳

##### 4-3-1 写本

『聖ブレンダン伝 (*La Vie de Saint Brendan/Brandan*)』を収める写本は次頁のリストのように **Réd B** が24写本、**Réd H** が2写本ある。表内の写本情報や分類は Sara Centili というイタリア人研究者に従っている<sup>32)</sup>。写本名に続くフォリオ番号は写本中の *Image du Monde* 部を示し、その中のブレンダン部のフォリオ番号をカッコ内に補う。

Sara Centili の分類はリュブリックの比較に基づくもので、詳細なテキスト比較の結果ではない。筆者自身は現在ブレンダン部のテキスト比較をおこなっているところだが、**Réd B** と **Réd H** が区別されることのほかには、**Réd B** 内では(11)と(14)が共通のモデルに遡ること以外に有効な系統関係を見出せていない。

なお、**Réd H** の2写本のうち(26)の Hamilton 577 は厳密には **Réd A** の1コピーと見るのが適切だろう。コピストの手元には **Réd A** の1写本のほかに **Réd H** の1写本があり、彼は作品としては前者を選択したが、そのコピーが完了したあとに後者から第1部末の4編の物語（『聖ブレンダン伝』から『プトレマイオス伝』まで）を付け加える。この加筆部については、『聖ブレンダン伝』を残すことが主目的で、残りは付け足しではないかと筆者は見る。

---

<sup>31)</sup> なお、*Image du Monde* の「インドの魚」の章 (**Réd. A**, II, 2, g / **Réd. B**, II, 3, i) にはイアスコニウスのモデルであるクジラの逸話が収められている。

<sup>32)</sup> Sara Centili, *La seconda redazione in versi dell'Image du Monde: una riscrittura didattica*, *Cultura Neolatina* v.66 n.1-2, 2006, pp. 161-206.

第2版写本リスト				
Réd. B				
	所蔵施設等	年代	制作地	分類
(1)	Amsterdam, Bibliotheca philosophica hermetica, 108, ff. 84v-154v 作者情報'Maistre Gautiers de Miés en Lorraine uns tres boins phillosophes'	14 s. (2/2)	Picardie	C
(2)	Berlin, Staatsbibliothek und Preussischer Kulturbesitz, Hamilton 575, ff.1-55	14 s. (1/2)	Meaux (Seine-et-Marne)	A
(3)	Cambridge, Gonville and Caius College Library, 384, ff. 1-158	13 s. (fin)	Normandie (?)	C
(4)	Cambridge, University Library, Additional 3303 (fragment, vv. 7477-7626)	14 s.	Angleterre	frag.
(5)	Chantilly, Bibliothèque et Archives du Château, 478 (1444), ff. 1r-84r (27r-40r)	13 s. (fin)	Nord-Est	B
(6)	London, British Library, Royal, 20. A. III, f. 1-120	14 s. (1342)	Angleterre	B
(7)	Madrid, Biblioteca nacional de España, 10272, ff. 1-96 (30v-45v) [http://bdh-rd.bne.es/viewer.vm?id=0000089044&page=1]	14 s. (1/2)	Nord-Est	B
(8)	Paris, Bibliothèque nationale de France, Arsenal 3168	15 s. (1429)	Nord-Est (Picardie - Pays-Bas)	D
(9)	Paris, Bibliothèque nationale de France, Arsenal 3522, 1r - 54v	14 s. (1/2)	Nord de la France	C
(10)	Paris, Bibliothèque nationale de France, français 1444, ff. 170v-217v (185v-192v) [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52513422x/f378.item]	13 s. (2/2)	Picardie	分類外
(11)	Paris, Bibliothèque nationale de France, français 1607, 1r-68v (25r-35v) [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b90590682]	13 s. (fin)	Angleterre (?)	D
(12)	Paris, Bibliothèque nationale de France, français 1807, ff. 1-51v [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9059028j/f3.item] f.8とf.9間に数分冊の欠落がありブレンダン部を欠くが、「地獄」の章(II 3 r)の後に「ユダ」挿入(ff. 27v-28v)	14 s. (1/4)	Nord-Est	分類外
(13)	Paris, Bibliothèque nationale de France, français 2168, ff. 95r-156r (115v-123v) [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b525135854/f205.item.r=français%202168] 数フォリオの脱落のため、Image du Mondeは冒頭の270行を欠く	13 s. (2/2)	Picardie	分類外
(14)	Paris, Bibliothèque nationale de France, français 2174, ff. 2r-70v (24v-35v) [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84496854/f9.item.r=Gossuin%20de%20Metz]	13 s. (fin)	France centrale (?)	D
(15)	Paris, Bibliothèque nationale de France, français 14961, ff. 1r-87r (27r-40r) [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9061303j/f31.item]	13 s. (4/4)	Limousin (?)	B
(16)	Paris, Bibliothèque nationale de France, français 25343, ff. 1r-87r (30v-33v) [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9063639t/f4.item.r=français%2025343]	13 s. (fin)	Lessay (Manche)	分類外
(17)	Paris, Bibliothèque nationale de France, français 25407, f. 1r-101v (32v-48v) [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9063681d]	13 s. (4/4)	Angleterre	A
(18)	Paris, Bibliothèque nationale de France, latin 10769, f. 122-177 (142r-149v) [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b10032648s]	14 s. (1/2)	Picardie	(C)
(19)	Rennes, Bibliothèque municipale, 593, f. 43r-80v (54r-60r) [https://bvmm.irht.cnrs.fr/mirador/index.php?manifest=https://bvmm.irht.cnrs.fr/iiif/5223/manifest]	14 s. (1303-4)	Paris (?)	B
(20)	San Marino (USA), Huntington Library, El.26.A.3, f. 1-152v (23r-54v)	15 s. (1410-15)	Troyes	C
(21)	Stuttgart, Württembergische Landesbibliothek, Cod. Poet. et Phil. in 4° 16, f. 14-76	14 s. (fin)	Angleterre	A
(22)	Tours, Bibliothèque municipale, 947, f. 1r-66v	14 s. (2/2)	Paris (?)	D
(23)	Vaticano, Biblioteca Apostolica Vaticana, Ottoboniani latini, 2523, f. 62ra-74va, Extrait.	15 s.	Belgique	frag.
(24)	Wien, Österreichische Nationalbibliothek, 3430, f. 112-299	15 s.	?	分類外
Réd. H				
(25)	London, British Library, Harley 4333, ff. 1-70 (25r-35v) [http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=Harley_MS_4333]	13 c. (fin)	Lorraine	H
(26)	Berlin, Staatsbibliothek und Preussischer Kulturbesitz, Hamilton 577, (ff. 240v-248v) [https://digital.staatsbibliothek-berlin.de/werkansicht/?PPN=PPN64779358X] Réd. A のImage du Monde の後 Réd. H のブレンダン部から第1部末までが載る	14 c. (début)	Paris (?)	H

#### 4-3-2 エディション

*Image du Monde* のエディションが遅れていることは先ほど述べたばかりだが、第2版に収められた『聖ブレンダン伝』は古くから研究者の関心を引き、その部分だけを取り出したエディションが下のとおり2点存在する。

1) Achille Jubinal, *La Légende latine de S. Brandaines, avec une traduction inédite en prose et en poésie romanes, publiée d'après les manuscrits de la Bibliothèque du Roi, remontant aux XIe, XIIe et XIIIe siècles*, Sylvestre et Jules-Albert Merklein, 1836.

『聖ブレンダン伝』は BnF. fr. 1444(旧 7526)に基づくエディションが pp. 105-163 に載り、pp. 164-7 にその訂正と BnF. fr. 2174 (旧 7991)のバリエントを付す。

2) Alfons Hilka, *Drei Erzählungen aus dem didaktischen Epos L'Image du Monde (Brandanus - Natura -Secundus)*, Niemeyer, 1928 (Sammlung romanischer Übungstexte 13).

第2版にあらたに加わった3つの物語(vv. 3575-5806)のエディションで、ブレンダン部はその第1話 (vv. 3575-5342)。

Jubinal のテキストは散文版 I と同様で間違いが多く信頼性を欠く。Gallica に公開されている底本写本と併せて読むことが求められる。

Alfons Hilka のものは、(26)の Hamilton 577 写本を底本とし、上述した同写本の追加部から『プトレマイオス伝』を除く3編のエディションで、校合写本として同じくベルリンの Hamilton 575 を使用している。現在では **Red. H** であることが判明している部分だが、Hilka は単に第2版の1テキストの認識しかなかった。

Jubinal ほど重大ではないとしても、Hilka のテキストも問題がないわけではない。写本の読みと食い違う箇所が非常に多いことに加え、読みの解釈などの点で賛成できない箇所も少なくない。

以上の2エディションに加え、現在 Sara Centili と Thomas Städtler による **Réd. B** のエディションが公刊予定となっている。写本リスト(16)の BnF. fr. 25343 を底本とし、同 fr. 1444 と fr. 2168 を校合写本に用いるとのことだ。この底本写本は、全体としては欠落や間違いが少なく **Réd. B** の中で最良の写本と言える。しかし、その唯一の重大な欠落が肝心のブレンダン部に存在することが惜しまれる<sup>33)</sup>。

---

<sup>33)</sup> 数フォリオの脱落の結果、ブレンダン部の半分あまりが失われている。

#### 4-3-3 ラテン語手本

*Image du Monde* 第2版に導入された『聖ブレンダン伝』のラテン語手本に関して、下に引用するように、訳者自身が一つの証言を残している。

D'un autre si après orrons.	このあと別の物語を聞く。
A saint Arnoult, une abbaie	聖アルヌール修道院、すなわち
De noirs moines, qu'est establee	黒い僧衣の修道士の僧院が
Droit devant Mes en Loherainne,	ロレーヌはメスの門前にあり。
Trouva l'istoire mont ancienne.	そこにてまことに古い物語を見つけ、
De latin l'a mis en roumans	ラテン語からフランス語に訳したのは
Por faire entendre as laies gens;	世俗の人々に読んでもらうため。
En .IX. jours de mars l'oi parfait	成し終えたのは3月9日
Mil .CC. ans .XLVII.,	1247年、
Et ces .II. ci après avec,	次の2作とともに。
Dont l'une comence siluec. <sup>34)</sup>	その1つがここに始まる。

*Navigatio* の仏訳を終えた直後、訳者はこのようにラテン語原典の所在、翻訳の意図、さらに翻訳の年月日を明記する。長い翻訳作業の終わりを記念する箇所に見るこうした証言は、聖ブレンダンとその航海の物語が訳者にとってそれほど特別な作品であったことを思わせる。

聖アルヌール修道院は、フランス革命で歴史に幕を閉じる運命にあるが、シャルルマーニュの最初の妻ヒルデガルドや息子のルイ敬虔王などが葬られ、カロリング王朝と関わり深い、由緒と権威を誇る修道院だった。

聖アルヌール修道院が所蔵し、*Image du Monde* 第2版に翻訳された *Navigatio* 写本がどのような性格のものだったかはこれまでのところ未開拓の問題で、まだ OG の系統樹への位置づけは行われていない。しかし、仏訳テキストを OG のラテン語祖型テキストと網羅的ヴァリエーションに照らし合わせることにより、現存するラテン語写本の中から仏訳にもっとも近い写本を見出すことはさほど難しいことではない。

紙数に制限があり本稿では証明の詳細は省かざるをえないが、多くの特徴的バリエーションが仏訳が OG の系統樹の  $\mathfrak{E}^6$  に入ることを示す。OG の分類でこのグループに

<sup>34)</sup> Hilka 版 vv. 1766-1776. 3行目の「黒い僧衣の修道士」はベネディクト会の修道士を表す。また、5行目の'trouva'、6行目の'a'の動詞は三人称単数ではなく、ロレーヌ方言に特徴的な一人称単数である。

属す写本は以下の7点で、メスのあるフランス東部からベルギーにかけてを分布圏とする。

- (1) **Br: Bern, Burgerbibliothek, 111** (12 s. / Metz 起源?)
- (2) **T<sup>2</sup>: Trier, Stadtbibliothek, 1143/445** (14 s. / Koblenz 由来 / フランス起源?)
- (3) **B<sup>1</sup>: Bruxelles, Bibliothèque Royale «Albert Ier», 9920-31** (11 s./ Liège 由来)
- (4) **P<sup>10</sup>: Paris, Bibliothèque nationale de France, lat. 5371** (13 s.)  
[<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b10545022q?rk=42918;4>]
- (5) **B<sup>6</sup>: Bruxelles, Bibliothèque Royale «Albert Ier», 3240 (18412)** (16 s.)
- (6) **Lg: Liège, Grand Séminaire, 6 F 14** (14 s.)
- (7) **B<sup>3</sup>: Bruxelles, Bibliothèque Royale «Albert Ier», 8629-39** (1477 年)

この7写本からなる **ε<sup>6</sup>** グループに、OG が取り上げていない8番目の写本を加えることができる。Charleville-Mézières (アルデンヌ県の県庁所在地)の市立図書館が所蔵する次の写本だ (略号として **Cv** を用いる)。

- (8) **Cv: Charleville-Mézières, Bibliothèque Municipale, 177** (14 s.) <sup>35)</sup>

Burgess & Strijbosch の *Critical Bibliography* に *Navigatio* の *Legenda Aurea* Versions リストに載る 11 写本 (pp. 27-28) <sup>36)</sup>の一つで、偶然オンライン公開されているのを見つけたものだ。*Legenda Aurea* は Jacobus de Voragine が 1261 年から 1276 年にかけて編纂を重ねた聖人伝集で、その普及の広さは聖書に次ぐと言われ、残存写本の数も 1000 を越えると言われる。Jacobus 自身は聖ブレンダンの伝記を採用しなかった<sup>37)</sup>。ただし各地に広まっていく中で、*Legenda Aurea* に地域固有の聖人伝を付け足す、あるいは地域固有の聖人伝集に *Legenda Aurea* を取り込むといったことがしばしばあ

---

<sup>35)</sup> この写本については右の論文に詳述されている : Cécile Lanéry, « Hagiographie et prédication : le légendier Charleville-Mézières, BM, 177 », in *Analecta Bollandiana*, 133 (2015), p. 282-349.

<sup>36)</sup> このリストは、*Legenda Aurea* 写本伝承に関する Barbara Fleith の研究書に依拠する : *Studien zur Überlieferungsgeschichte der lateinischen Legenda aurea*, Bruxelles, Société des Bollandistes, *Subsidia Hagiographica* 72 (1991), p.457.

<sup>37)</sup> Jacobus de Voragine がブレンダンを排除したことは、ブレンダンの物語に対する評価に是か非かの両論があったことを示す。



り、そこに *Navigatio* が加えられる例も生じた。Cv 写本はその例のひとつだ。この写本に収録された *Navigatio* は、残念ながら、聖人伝集の編纂者がしばしば行うように縮約されたもので、元テキストのちょうど半分ほどが失われている。しかしながら、編纂者は残すことに決めた部分についてはおおむね機械的に元写本を模写しており、そのおかげでこの *Navigatio* は紛れもなく  $\epsilon^6$  に属すこと、なおかつ Br 写本の *Naigatio* に極めて近いことを教えてくれる。

実は、*Image du Monde* の *Navigatio* 仏訳が最も近いのもこの Br 写本と Cv 写本にほかならない。Cv 写本には「Jean de Metz なる元 Saint-Arnoul の修道士が 1328 年に Mont-Dieu にもたらした」との書き込みが残されている。Mont-Dieu というのはカルトウジオ会修道院のひとつで、Charleville の東南（メス方向）20~30km のところにあった。Jean de Metz が Mont-Dieu 修道院に持ってきた写本はメスの聖アルヌール修道院で編纂された聖人伝集と見ることができよう。その中に *Image du Monde* 版仏訳に極めて近い *Navigatio* テキストが入っているということは、仏訳者が聖アルヌール修道院で見つけた古い物語をラテン語からフランス語に訳したと書き記した数十年後にやはり、その原本あるいはそれに酷似した写本が聖アルヌール修道院に存在していたことになる。

#### 4-3-4 フランス語テキスト

先に引用したように、仏訳者が「ラテン語からフランス語に訳したのは世俗の人々に読んでもらうため」と語っていた。

Entendez ci de saint Brandent	これより聖ブランダンについてお聞きください。
Qui fu nez devers occident,	この西方に生まれた聖人が
Qui .VII. ans erra par la mer	七年のあいだ海をへめぐったのは
Por plus douter Dieu et amer. <sup>38)</sup>	さらに神を恐れ愛するがため。

翻訳は上のように始まり、フランスの読者になじまないブレンダンの系譜部分は省かれている。ブレンダンの生地もぼかさされ、「西方」とのみ記されている。全体的に翻訳者は原典の内容に対して忠実な姿勢を維持する一方、冒頭部のように訳者により不要と判断された細部、冗長と感じられる部分、解釈の難しい箇所など、省略または書き替えの対象となった部分が少なくない。加えて、典拠不明の加筆と見

---

<sup>38)</sup> Hilka 版 vv. 1-4.

える箇所も多々存在し、それらが訳者みずからの自由な加筆なのか、それとも第2の（あるいは第3の）ラテン語手本が介在してはいないか、今後の検討を要する問題である。

以上、*Navigatio* の四者四様の古仏語版を見てきた。

これらがフランス文学史の表舞台には登場することはない。かろうじて **Benedeit** の作品が文学史の片隅を占める程度だ。しかし、いずれも *Navigatio* の受容と流布の研究の一角を担うべき基礎資料であり、また一つ一つがフランス中世における文学活動の貴重な証言であることに変わりはない。本稿ではそれぞれの古仏語版の性格について踏み込むことはできなかったが、そうするにはその土台となるテキストに信頼性が求められる。**Benedeit** 作品のテキストについてはおそらく **Waters** のエディションで充分であろう。散文版 I については、フランス語写本が1点しか残存していない現状では多くを望むことはできない。それでも、幸い仏訳にもっとも近いラテン語写本 (**La**) が判明したことから、少なくとも **Wahlund** の外交的テキストではなく、同写本との「校合」に基づく新しいエディションが可能だろう。それぞれ20数点の写本が現存する散文版 II と *Image du Monde* 版については、写本を精査したうえで信頼度の高いテキストの確定が待たれる。